



限本教授(上)から学んでいる多くの学生や薬害被害に関心のある一般の人たちが参加した。HPVワクチンの実態について詳しい説明を受け、実際に被害者に会ったことにより、問題の深刻さが理解できた。



国が接種を勧めた HPVワクチンの副作用に 苦しむ女性たちとの交流

江戸川大学で薬害の実態を知り、考える企画を開催

11月3日、江戸川大学駒木祭で、「被害者とともにHPVワクチン(子宮頸がん予防ワクチン)を考える」と題した企画が行われ、関東甲信から5人の被害者のご家族にお越しいただいた。HPVワクチン薬害の問題は、国と製薬会社を相手取った集団薬害訴訟となっている。メディアコミュニケーション学部マス・マスコ

ミュニケーション学科限本邦彦教授は、「皆さん、一度でいいからちゃんと話を聞いてください。話を聞いてそこから関心をもつのも無関心になるのも自由です。しかし、一度も話を聞かずに何かを判断するのはやめてほしい」とこのイベントの趣旨を話した。(撮影: 池谷明日香 取材・文: 渡邊健介)

この子宮頸がんを予防するために作られたのがHPVワクチンだ。15種類あるハイリスク型の内、16型と18型の感染予防をする効果があるとされており、遺伝子組み換え技術を使った新しいタイプのワクチンである。

このHPVワクチンを接種したことにより、全身の疼痛、知覚障害、運動障害、記憶障害等の深刻な副作用

報告してもらい、それを自然で起こる率と比較し、因果関係を推定する。しかし、日本の法律では、報告をするのは医者や製薬会社だけ。製薬会社は自分たちが作ったワクチンなので、副作用を積極的に報告したくない。そのため報告が上がっていないという。日本では、医者や製薬会社はワクチンの安全対策を任せているのが現状なのだ。

HPVが子宮頸部の細胞の核に入ると、細胞分裂をしていて、最後に自分の分身を細胞外に出して感染を広げる。ウイルスが子宮の基底膜の細胞に入ると、それから先はワクチンでは排除できない。ほとんどの細胞は剥がれ落ちるが、中には剥がれ落ちないこともあり、これが最終的にがんになる。

(裏面に続く)

薬害被害者の女性が登壇する前に、限本教授からHPV(ヒトパピローマウイルス)とHPVワクチンについて説明があった。HPVは、人間の皮膚にイボを作るありふれたウイルスだ。100種類以上あり、うち約15種類のハイリスク型が子宮頸部の粘膜に感染すると、ごくまれな割合で子宮頸がんになるとされている。

因果関係の証明は困難

それではワクチンを接種したことにより、副作用が出たという因果関係を証明するためには何が必要か。限本先生によると「症状がワクチンのせいかどうか考えるのは難しく、一例だけみて因果関係が分かることは普通でない。そのため、接種した人たちにどんな有害なことが起きたのか全部

報告してもらい、それを自然で起こる率と比較し、因果関係を推定する。しかし、日本の法律では、報告をするのは医者や製薬会社だけ。製薬会社は自分たちが作ったワクチンなので、副作用を積極的に報告したくない。そのため報告が上がっていないという。日本では、医者や製薬会社はワクチンの安全対策を任せているのが現状なのだ。

HPVが子宮頸部の細胞の核に入ると、細胞分裂をしていて、最後に自分の分身を細胞外に出して感染を広げる。ウイルスが子宮の基底膜の細胞に入ると、それから先はワクチンでは排除できない。ほとんどの細胞は剥がれ落ちるが、中には剥がれ落ちないこともあり、これが最終的にがんになる。

(裏面に続く)

(表面から続く)

実は早めに発見して命に別条のないようにする子宮がん検診がある。がんになる前に細胞がちよっと変化したところでチェックができる。だが、産婦人科医が男性である場合、若い女性の方からみれば調べてもらうには恥ずかしさがある。

そのためイギリスでは若い女性でも検診しやすいようにスミアティーカーと呼ばれる女性が男性医師の代わりに検診する制度を整備したところ検診率が上がった。

知ることから始める

グループでの交流会に参加したメディアコミュニケーション学部マス・コミュニケーション学科1年生の古瀬皓也さんは「副作用により残る痛みなどの症状が本当に深刻だと初めて知りました。また、中学や高校で受け入れてもらえなかったと聞いてとても辛かった。ドアを開けたり車いすを押しあげるとか、些細なことでもやっていきたい」と話した。

企画では副作用の被害を受けた5人の女性が登壇し、その後5つのグループに分かれ、彼女たちと質疑応答を行う機会が約50分ほど設けられた。

和やかな雰囲気であったが、辛かったことなどを質疑応答したり、被害者の方のさらに詳しい話に耳を傾けたり、グループごとに交流の形はさまざまだった。しかし、いずれのグループも副作用問題を真

摯にとらえ理解を深めていた。

たとえば園田絵里菜さんとお母さんは、厚労省の対応のこと、ワクチン副反応には知られていない国や製薬会社とのやりとりを話してくれた。

グループでの交流会に参加したメディアコミュニケーション学部マス・コミュニケーション学科1年生の古瀬皓也さんは「副作用により残る痛みなどの症状が本当に深刻だと初めて知りました。また、中学や高校で受け入れてもらえなかったと聞いてとても辛かった。ドアを開けたり車いすを押しあげるとか、些細なことでもやっていきたい」と話した。

また同学科2年生の石井悠太さんは「同世代の自分たちが薬害に関する情報を共有や拡散したりすることで伝えていくことが大切だ」と思う。社会で起きていることに興味を持ち、しっかりと学びたい」と話した。

HPV ワクチン副作用の被害者たちが登壇して伝えてくれたこと

行政の勧めで小学生から高校生のときに接種したワクチンの副作用は激烈だ。だが、彼女たちの話からわかるのは、体の痛みだけでなく、医療機関や国から副作用の存在自体を無視されることで、人間としての尊厳を否定されていることのつらさだ。

体を元に戻す方法も考えてくれない

本人希望により本名は非公表（北関東）

私は現在17歳高校生です。12歳の5月にHPVワクチンを接種しました。接種したところにより翌日から太ももに強い筋肉痛、2回目の接種では薬液が体内に入ると同時に激痛にあり接種した右腕は上がらなくなりました。

5年経った今でも関節の痛み、運動障害、重度倦怠感、生理痛、短期記憶障害などの障害が残りました。

たくさんの方に「助けて」と声を上げました。みんな頑張っている」と声をかけてくれましたが、私の体を元に戻す方法を考えくれませんでした。

私はこの裁判で未来を取り戻したいです。私は大人が作った、大人が勧めたHPVワクチンを接種しました。そしてこの体になりました。大人はすべての薬剤、薬にはリスクがある、ゼロリスクではないと言いがらこの子宮頸がんワクチンの副反応を認めてくれません。私は元の健康な体に戻すことをあきらめません。

一番信じて欲しいお医者さんさえ信じてくれない

山田梨奈さん（東京都）

私は中学1年生のときにHPVワクチンを打ち、中学2年生のときに急に歩けなくなりました。そこから股関節の痛みから、いろんなところに痛みや支障が出てきて、記憶にまで支障が出てきました。

一番つらいのは、理解してくれない人の心ない言葉です。なにより一番信じてほしかったお医者さんに信じてもらえなかったことです。

お医者さんは打つことには大賛成します、しかし副作用に遭ってみれば手のひら返しでそれは詐病だと、そんな事実はないといひます。

今私たちの目の前には、ワクチンの実態を知ろうとしてくれる学生と一般の方が来てくれています。それはとても心強いことです。私たちが闘っているのは大きな製薬会社と二つの国です。それプラス自分の症状と闘ってます。



HPVワクチンが奪った夢を私は取り戻したい

望月瑠菜さん（山梨県）

私は8年前の小学6年生のときに、接種しました。接種部分が赤く腫れ、かゆみ、体のあちこちが痛くなりしました。原因が分からなかったのですが、受診していた大学付属病院の先生に典型的なHPVワクチンの副作用と言われました。

そのあと自分なりに調べましたが、治療法がないことを知り、病院に行っても診断されるだけで治療法がなく、とても悔しく悲しくなって落ち込みました。

高校2年生のとき、進路希望調査に理学療法士になりたいと書きました。でも、たった3回のワクチンによってその夢は奪われました。日本に生まれてを本当に良かったと思っていたので、今の国と闘っている状況はとても悲しいです。未来を、希望を取り戻すために闘います。



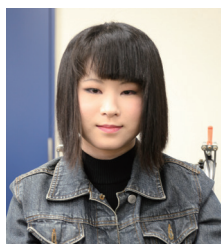
データではなく人間として私たちを見てほしい

園田絵里菜さん（千葉県）

中学3年生のときHPVワクチンを接種したことで、腹部に強い痛みが出ました。また、全身の痛みやひどい倦怠感などの症状が出て、通学途中に気を失う一歩手前まで行くこともありました。

毎日ひどい症状を感じる中、死にたい、死んだほうがまし、と思ったこともありましたが、母は「お母さんが打たせたためにあなたの未来を奪ってしまったね。本当にごめんね」と泣きながら謝ってきます。そんな母を見ると心が痛みます。

どんなに痛い、苦しいと訴えても医者や学校の先生に理解してもらえず、心ない言葉にとても傷つきました。体が思うように動かないため、学校に行けず学ぶ機会を失いました。私たちをデータとしてみるのではなく、何より人間としてみてほしいです。



無責任にHPVワクチンを勧奨した国を許せない

瀬川愛さん（神奈川県）

HPVワクチンを、中学2年生だった2011年8月と9月、2012年3月に3回接種しました。接種前は喘息がありましたが、喘息以外で学校を休むことはほぼありませんでした。

接種したことにより、膝に痛みが強くなりました。強い倦怠感と疲労感が現れ学校に行くことも困難になりました。学校には配慮の願いをしましたが、退学を迫られました。退学せざるを得ませんでした。現在は複数の症状がありとくに高次脳機能障害で困っています。

HPVワクチンを勧奨されている方々は、診察もせずに心の問題だと決めつけていることが多いです。その反面、良い先生にも出会いました。だからと言って、無責任にHPVワクチンを推奨した国を許せるわけではありません。

